

第5部

1. 物質の力が生むことのできない理性的魂

デカルトは、第一の真理と認められるものから演繹し、他の数々の真理を見い出していきました。彼はそれらの連鎖全体を示していきたいと思いましたが、「地動説」など、当時の学者たちの間で論争中の問題に関わる事柄も多く、これを差し控えたのです。

その代りに、同じ方法で同じ原理を用いて、神の存在と魂の存在を証明することに取り組んだのです。それに際して、これまでに用いた原理以外は何も想定しない、そして、以前に幾何学者の論証が明晰で確実だと思われた以上に明晰で確実だと思われないものは、何も真として受け入れないと決意し、これを堅く守って進みました。

そして彼は断言したのです。自分は、哲学で取り扱うならわしになっている主要な難問のすべてについて、自分自身が満足できるようなやり方をわずかな時間で見出し、そしていくつかの法則をも認めた。それらは自然法則であり、さらには論理学や数学の法則でした。

また、これらの法則は、神が自然の中にしっかりと定め、かつその概念をわれわれの魂の中に強く刻み込んだので、十分に反省を加えれば世界に存在し生成するすべてのものにおいて、それらの法則が正確に守られているのを疑いえないのだと。

そしてさらに、彼はこれらの法則の帰結を考察して、それまでに学んだすべてのことや、それを学びたいと望んでいたすべてのことよりも、有益で重要な多くの真理を発見したと思ったのです。

これらの真理の主なものは、1633年にほぼ完成していた「世界論」の中で説明されていたのですが、同年にガリレイ断罪の報に接したため、デカルトは出版を控えたのです。結局この書は、彼の生前には出版されず、死後になってクレルスリエによって刊行されました。

デカルトは、「世界論」を書く前に、物質的事物の本性について自分が知っていると考えたすべてのことを、その書に収めようと構想していました。しかし、彼はそれを諦めます。その理由は、画家たちが立体的なものを絵に描くと、表も裏も全ての側面を平面にうまく再現できないのと同じように、自分もまた自分の頭の中にあること全てを、この論文の中に入れることはできないと懸念したからです。

そこで彼は、光について捉えていたことだけを十分に詳しく説明することにし、その機会に、光を発する太陽と恒星について、光を伝える天空について、そして光を反射する惑星、彗星、地球について、さらには光を浴びて多様な様相を呈する地上の物体について、そして最後に、光を感じ取る人間について、いくらかのことを付け加えようと考えました。

それに加えて、こうしたこと全てを陰に置いて、対象について自分の判断を自由に表明できる、新しい世界で起こるはずのことだけを語ろうという決心もしたのです。それを語るに当たっては、学者たちの間で受け入れられている見解に賛成したり反対したりしないですむように、この現世界はそっくり学者たちの論議に委ねてしまうことにしました。

彼が語ろうとした新しい世界とは次のようなものでした。

仮に神が今、想像空間のどこかに新しい世界を構成するのに十分な物質を創造したとします。そして、その物質の様々な部分を様々に無秩序に揺り動かして、詩人が想像しうるほどの混沌たるカオスを作り出したとします。その後はただ、神が立てた自然法則によって通常通りに維持する力だけを自然に与え、神自身が定めた法則に従って自然が動くに任せた場合の、この新しい世界のことです。

こうした前提の下に、デカルトは新しい世界の物質について、これほど明晰で理解しやすいものはこの世にないと感じられるほどはっきりと表現し記述しようと努めたのでした。そう言えるのは、その物質の中には、学校で議論されている実体的形相や実在的性質などは一つもなく、一般的に、それを認識することが私たちの魂に生まれつき具わっており、知らないと仮想もできないものは一つもないと、彼には、はっきりと想定できたからです。但しそれは、前に神と魂について述べたことを除いてのことでした。

このようにしてデカルトが取り組んだことは、次のようなことでした。

- ・自然の諸法則が何かを示すこと
- ・神の無限の完全性という原理のみに論拠を置いて、少しでも疑いをはさむ余地のある法則を全て証明することに努めること
- ・「これらの法則は、神が多数の世界を創造したとしても、これが守られない世界は一つとしてしてあり得ない」と示すことに努めること
- ・このカオスの物質の大部分が、これらの法則に従って、どのようにして一定の仕方で並び、連なって、我々の天空に似たものになるはずかを示すこと

こうした取り組みの過程で、地球、惑星、彗星、恒星の形成について論じ、これらの天体の存在と密接に関係する光についても論を進めました。特に地球については多くの

ことを語る結果となりました。

それは、地球の重力について、水と空気について、潮の干満について、海流や風について、山・海・湖・川の生成について、鉱山の金属について、植物の生長について、火の本性について、物質の熔解や凝固について、灰から生成されるガラスについて、といったことが対象でした。こうしたことについて論じ、記述することに、デカルトは大きな喜びを持っていたのでした。

デカルトは、こうしたことを論じ記述しながらも、自分たちの住むこの世界が彼の提示したような具合に創造されたと推論するつもりはありませんでした。その理由は、神が最初からこの世界をそれがあるべき姿にしたと言うほうが、はるかに真実らしいと思われたからでした。しかし、神が今この世界を維持している働きは、神が世界を創造した時の働きと全く同じであることは確実だと考えていました。

それゆえに、たとえ神が最初はこの世界にカオスの形しか与えなかったと仮定しても、同時に神が、自然法則を設定し、自然がいつもそのように働くような力を与えたとさえするならば、創造の奇跡を損なうことなく次のことを信じることができると論じました。

それは、純粹に物質的なものは全て時間とともに、現在私たちが見るようなものになり得たということです。また、それらの物質的なものの本性は、このように少しずつ生成するのを見るほうが、完全にでき上がったものとしてのみ考える場合よりも、はるかに把握しやすいということです。

デカルトの論と記述の対象は、生命を持たない物体から、そして植物から動物へ、特に人間へと移っていきました。しかし、これらのことについては未だ知識が充分で無かったために、原因によって結果を論証し、どういう種子からどういう仕方で自然がそれらを生み出すはずかを示すことができなかったのです。

そこでデカルトは、ある想定をすることで満足するしかありませんでした。即ち、神は、手足の形状も器官の内部構造も、私たちの一人とそっくりの一個の人体を作ったのだと想定したのです。しかも神は、デカルトが記述した物質だけを用いてそれを組み立て、最初はその人体の中に、理性的魂も、植物的あるいは感覚的魂の働きをする何ものも宿らせることなく、前に論じたあの光なき火の一種をその心臓の中に生じさせたと想定しました。

こうした想定の下にデカルトは、この身体のうちに生じ得る諸機能を検討し、そこに、私たちの内にありながら、私たちがそれを意識しないあらゆる機能をそっくり見い出しました。私たちがそのような機能を意識しないということは、私たちの魂（即ち、身体と

区別されて、考えることだけがその本性である部分) が何の参与もしていないということに他なりませんから、これらの諸機能は全て、理性を持たない動物がその点で私たちに似ていると言える機能と同じだという訳です。

デカルトはこうした想定からは、思考に依存し、人間としての私たちだけに属する機能を何一つ見い出すことはできませんでした。しかし後になって、神が理性ある魂を創造し、それをある仕方での身体に結び付けたと想定してからは、そうした人間独自の機能を見い出すことができたのです。

こうした問題をどんな具合に扱ったかは、デカルトが出版するつもりだった論文で、個々に詳しく説明していたようです。それは次に上げる項目にわたっていました。

- ・心臓と動脈の運動について
- ・人体の内部にあって肢体を動かす力を持つ筋肉と神経の構造について
- ・覚醒、睡眠、夢を引き起こす脳内の変化について
- ・光、音、匂い、味、熱などの外的対象の観念の脳への刻み付けについて
- ・飢え、渇きなどの内的情念の観念の脳への伝達について
- ・脳内でこれらの観念が受容される共通感覚とみなされるべきものについて
- ・こうした観念を保存する記憶について
- ・観念を様々に変えて、新しい観念を組み立てたりできる想像力について

こうした問題の扱い方を示すために、デカルトは心臓と動脈の運動に関する記述を、一例として方法序説に紹介しています。但し、この血液循環に関する記述は誤りであることは今では明白です。

デカルトの記述は、当時の科学では、解剖学や生理学を通してその程度のことまでしか解明されていなかったことの証しと言えるでしょう。デカルト個人の誤りと言い切ることはできません。

デカルトは上記のうちの想像力を重視して、次のようなことを語っています。

- ・想像力は動物精気を筋肉に配分することによって、その肢体を様々な風に、かつ感覚に現れる対象と身体の中にある内的情念に応じて動かすことができる
- ・それは我々の肢体が意志に導かれることなしに動くのと同程度にできる

このようなことを語った上で、デカルトは次のように断言しています。人間の巧知がいかに多種多様の自動機械を作りうるかを知っている人たちでも、この人体を、神の手によって作られ、人間が発明できるどんな機械よりも比類なく整えられ、見事な運動を自らなしうる一つの機械とみなすであろうと。

以上の説明を進めるに当ってデカルトは、次のようなことを示そうと強く意識していました。

- 例えば猿か何か、理性を持たない動物の器官と形状を持つ機械があるとすれば、この機械がその動物と同じものではないと見分けるための何の手段も我々は持っていないだろう。これに対して、我々の身体に似ていて、實際上可能な限り我々の行動を真似る機械があるとしても、それが人間ではないと見分けるためのきわめて確実な二つの手段があるだろう。
- 第一の手段は、これらの機械が、我々が自分の思考を他人に対して表明するのと同じように、言葉を使うことも、他の記号を組み合わせることも、決してできないであろうということだ。これらの機械が言葉を発するように、器官の中に何らかの変化を引き起こす身体作用に応じて、それに合った言葉を出すように作られていることは有り得るだろう。しかし、目の前で話される全てのことの意味に応じて返答するために、言葉を多様に配列することは、人間なら誰でもできることだが、機械に同じことができるとは考えられない。
- 第二の手段は、このような機械が多くのことを我々の誰とも同じように、あるいはそれ以上にうまくやるとしても、ある点でどうしても成し得ないことがあるということだ。それは、機械は認識することによって動くのではなく、ただその諸器官の配置によって動くだけだということだ。理性がどんなことに出会っても役立ち得る普遍的な道具であるのに対して、これらの諸器官は個々の行為のために、それぞれが個別的な配置を必要としている。従って、生のありとあらゆる場合に応じて理性が我々を動かすのと同じ仕組みを、一つの機械の中に具備させ、それを機能させることは実際的には不可能なことなのだ。

この二つの手段によって人間と動物の違いも知ることができると、デカルトは語っています。その根拠として上げていることは次のようなことです。

- 人間ならばどんなに愚かで頭が悪くても、狂人でさえも、色々な言葉を集めて配列し、ひと続きの話を組み立てて自分の考えを伝えることができるが、他の動物には、如何に完全でどんなに生まれつき素質が良くても、同じことができるものは存在しない。即ち、音声を発する動物でも、我々のように、自分が言うことは自分が考えていることだと明示しながら話している訳ではない。
- 幼い子供や知恵の発達障害を持つ人たちでも話すことができることから、話すことができるためには、ごくわずかの理性しか必要としないことが解る。動物たちのうちで

最も完全だと受け止められるものでもこうしたレベルにまで至っていないことは、動物たちの理性が人間よりも少ないということではなく、動物たちには理性が無いことを示していると言える。

- ・動物たちの魂が我々人間の魂と全く異なるものだとしない限り、こうしたことを理解し信じることは不可能だ。

こうした論拠からデカルトは、動物たちには精神がなくて、自然が動物たちのうちで諸器官の配置にしたがって動いているのだと結論付けました。

以上のような理性的魂の追究を通してデカルトが得た結論は、この魂が、これまでに述べてきた他のもののように物質の力から導き出されることは決してあり得ず、特別に創造されねばならないということでした。

また、人間が単なる動物ではなく真の人間であるためには、理性的魂が身体と結合し、より緊密に一体となる必要があるということでした。そして、動物の魂と私たちの魂がどれほど異なっているかを知ることを通して、私たちの魂が身体に全く依存しない本性であり、身体とともに死すべきではないことが理解されるということでした。

こうした思想を統合するものとして、デカルトは神という言葉で表現する或る一つの概念を導入しましたが、この神は、それまでの時代に支配的であった神や、現代に神という言葉で表現されるものとは異なるものだったのです。

ローマ法王庁によるガリレイの断罪の影響を受けて、世界の体系の連鎖全体を示すことを諦め、その代わりに神の存在と魂の存在を証明することに取り組んだデカルトにとって、神の概念がそのようなものになったのは当然のことだったのです。